

平成16年度事業報告書

平成16年9月13日から平成17年3月31日まで

特定非営利活動法人TICO

1 事業実施の方針

主にザンビア共和国に対して、地球規模の問題に苦しむ人たちの自立の支援と、持続可能な社会の構築を目指すための事業を行う。また、地域のニーズに沿った計画を立てるための情報収集活動も並行して行う。

国内では開発教育、地球市民教育などにも積極的に取り組む。

2 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

定款の事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	支出額(千円)
生活向上の機会を著しく奪われている人々の問題解決に資する協力事業	民生改善事業 ・ 母親に対する栄養改善指導, 調理実習, 洋裁教室 ・ ナーサリースクール運営支援	週1回 通年	ザンビア共和国 ルサカ市	5人	ンゴンベ地区 一般 累積120名?	0
	ルサカ市救急隊整備計画 ・ リサイクル救急車や関係資機材の寄贈 ・ 119番型救急救助隊の基盤整備 ・ 救急救助関連機関における連携システムの構築	通年 24時間	ザンビア共和国 ルサカ市	48名	ルサカ市民 一般 200万人	1,857
	旱魃に強い村作り ・ 農村開発ローン ・ 家畜糞浴槽リサイクル活用 ・ 充血吸虫症予防活動 ・ 有用樹木普及事業	通年	ザンビア共和国 チペンビ郡	5人	チペンビ郡 住民一般 3万人	837
	ザンビア事務局運営	通年	ザンビア共和国 ルサカ市 TICOザンビア事務局	4人	ルサカ市民 一般 チペンビ郡 住民一般 153万人	662
会報及び出版物の発行	機関誌, パンフレットの発行	3回	事務局	1回当たり5人	会員・一般 500人	54
国内での開発教育に関する	徳島県内外の学校, 講演会, セミナー等への講師派遣	計12回	県内外の学校等	4人	参加希望者	0

事業	徳島県内外の学校、講演会、セミナー等への講師派遣	計12回	県内外の学校等	4人	100人程度)	0
	地球市民教育勉強会(地球人カレンダー)の開催	月1回 計7回	吉野川市 山川町さくら診療所	1回当たり5人	勉強会出席者 (1回当たり30人程度)	26
他の市民活動を行う団体の運営または活動に関する連絡、相談、助言等の事業	他の市民活動を行う団体との共同支援活動、他の市民活動を行う団体への相談、助言	随時	事務局	3人	他の市民活動を行う団体 (約20団体)	200

(2) その他の事業

実施した事業はありません。

各事業についての補足説明

I. 海外事業

1. 民生改善事業（ルサカ市ンゴンベ地区）

【事業状況】

現在は、コミュニティーの現地職員による自立した運営を側面から支援する形を取っており3年が過ぎたが、運営スタッフの努力により、わずかの資金提供であるが、スムーズに運営が行われており、完全な独立も近いと思われる。

【今後の方針・見通し】

平成18年度までは資金提供を継続するがその後については、状況を見て判断することとする。

2. ルサカ市救急隊整備計画（ルサカ市全域）

【事業状況】

- 同事業は、T I C Oの姉妹団体であるS C D Pとの共同事業であり、T I C Oは、主に車輛や機材の輸送等に係る業務とその費用について支援を行った。
- 昨年度、ザンビア警察やルサカ市消防本部との連携が飛躍的に進み、救急救助隊が守備する範囲の拡大により、車輛の寄贈や救急隊待機所の整備が進んだ。また、神戸市消防局の有志で救急救命士や救助隊員の方々がボランティアにて参加しザンビアにて警察官、消防官、そしてボランティア救急隊員に対し短期技術研修が行われた。
- 同救急救助隊の発足はザンビア国において初めての試みであるが、徐々に市民からも認知されてきた。この結果、市民からの救急の要請数も増えている（添付統計を参照）。人命救助や市民生活における安心感の提供など貢献度も大きくさらには期待度も大きい事業である。しかしその反面、車輛の確保やメンテナンス費用、ガソリン代等において大きな経費がかかるなど、同プロジェクトの持続発展における課題となっている。しかし、警察庁が救急車5台への燃料を負担するに至り、現在ではT I C O側の支援から燃料を購入することは昨年12月に終了している。また、ルサカ消防本部における救急救助隊業務の運用は、市消防本部の予算にて実施しており、T I C Oには負担がいたっていない。一方、地域市民の参加によって主に運営されているボランティア救急隊は、ボランティアの交通費および弁当代をインセンティブとしてT I C O・S C D Pにて支援をおこなっており、この部門での継続支援は避けられない状況にある。しかし、最近になり民放テレビ局のM U V I テレビがスポンサーとなり、今週から毎週金曜と月曜に当方ボランティア隊を中心とする活動が放映されることになり、無償広報が行われる。番組中に寄付をお願いする広告を含めて放映をしてくれることになっていることから、救急隊管理委員会では、口座の新設など対応に追われている。さらには、南アフリカのテレビ局が、同救急隊活動のテレビプログラムを購入したいというオファーもあり、南アのテレビ局を通じ世界に放映される可能性がでてきている。持続発展性を高めるため、各救急隊は管理委員会が定める、一般急病人の搬送を有料とし費用の一部回収が昨年からは始まっている。これにより、現在のところ救急車が大きな事故に巻き込まれたり、修理不可能な故障が発生しない限り、日々の救急隊運営管理は現在の収益を確保するスキームにより独立採算へも近づける可能性がでてきている。もちろん、機材や車両そして救急隊詰所の増設や改善には外助が今後も必要であることは事実である。総合的に判断すれば、運営費なども最低限に抑制されてきていることは事実で、救急隊管理委員会にもう一分張りしていただきたい。
- H16年4月からの投入として、救急車を3台（神戸市—高規格救急車1台・水戸市—デリカ2B型救急車1台・神戸市消防団有志寄贈のボンゴ1台）と、救助車として1台（神戸市寄贈小型消防車）、指揮車として1台（神戸の有志寄贈パジェロ）を日本からT I C Oが支援し、現地に配備した。
- 輸送にかかる経費のうち、水戸市寄贈のデリカ救急車と神戸市寄贈小型消防車の分については、和太鼓奏者ヒダノ修一氏と鎌倉のカトリック大船教会の有志の皆様によるチャリティーコンサートの収益が充てられた。
- 現地連携機関である、警察庁より警察庁長官と救急隊管理委員会の委員長には、今後ともザンビア国における救急救助業務システムの構築において尽力をいただく必要があるが、災害先進国である日本にてこれまで培われてきた、防災技術、災害への対応手法などの英知を実際に見ていただき、今後のシステムづくりに資するため、ご両名をS C D Pが日本へ派遣する。よって、T I C Oにおいては簡易受入をJ P Rと連携して行い、本邦にて意見交換を行う。

【今後の方針・見通し】

平成17年度は、基本的には輸送コストが高い車輛などの寄贈の支援は行わない方針で、側面的な運営管理部門への支援のみと考えており、同支援はSCDPを通じ無償資金協力とする予定である。

ボランティア救急隊では、現在の警察と消防との連携体制を保持しつつも、独立採算制で救急業務が実施できるように努力するために、公益法人化の決議がされ、今月から来月にかけて法人化が実現する予定である。これにより、有料そして無料の救急サービスを分割して提供することも可能になることから、市民のニーズに応じ有料救急隊もしくは無償の救急隊の選択が可能となる。これにより、有料救急隊にて得た収益を無償救急隊（交通事故などの救済事業）の運営管理費に充当することで、独立採算制が取れるかどうか見極めていくことになっている。交通事故や貧困に苦しむ地区からの救急要請については、これまで通り無償もしくは特別低額指針にのっとり地域住民への支援を継続する予定である。

ルサカ市内全域をカバーする場合、1団体では不可能であることから、これまで通り警察と消防との連携を強化しつつ、ルサカ市内全域で発生する救急救助事案に対応する総合システムとして基盤整備へ技術的指導を継続する予定である。

また、神戸市消防局の職員有志が主体となって設立された日本国際救急救助技術支援会（JPR）にさらなる技術的支援を依頼し、TICOとしても可能な範囲で連携を取るなど、長年支援を続け基盤整備を行ってきた事業だけに、今後の自立発展性を見極めつつ活動を見守っていきたい。

3. 早魃に強い村作り

① チペンビ

【事業状況】

農村開発小規模ローン

- これまでに5グループが返済終了し、評価ワークショップを通じて新たな活動へ移っている。ここまでの活動は足踏みポンプ導入、養鶏、ハンドポンプ導入、タックショップ（駅にあるキオスクのようなもの）運営支援、搾油機導入など。現在は幼稚園運営支援、養鶏、タックショップ運営支援を行っている。

ディップタンク

- 朽ち果て使用されていなかったディップタンク二つを修理、使用可能状態とした。運営管理は全てコミュニティーに任せて順調に動いている。

アグロフォレストリー

- チペンビ農業学校と協力し、近隣農民たちに有用樹木普及ワークショップを定期的開催している。チペンビ農業学校で種や苗木を増やし、近隣農民に配布、普及を図っている。

【今後の方針・見通し】

農村開発小規模ローン

- 支援グループ数をただ増やすだけでなく、よりニーズに合わせて農民が継続していける形で支援していく。

ディップタンク

- どちらも支援開始から1年以上が過ぎ軌道に乗ってきたのでモニタリング頻度を下げて見守っていく。現在もう一つ支援要請が来ており、視察も済んでいる。早急に支援を開始して2005年中には軌道に乗せたい。

アグロフォレストリー

- 結果がすぐ現れるプロジェクトではないので、気長に普及を計る方針。農業学校中心から、普及に力を尽くせる農民を作り出していくことも必要となろう。

② カルブウェ

【事業状況】

- 未使用状態の井戸を修理、ハンドポンプを設置、野菜栽培技術移転ワークショップを行い、野菜栽培を促す。後にリザーブタンクも設置。野菜栽培販売を通じて収入向上を図る。

【今後の方針・見通し】

- 国際開発救援財団より助成金交付が決定。太陽光発電ポンプとドリッピングイリゲーション導入を行う。大きな問題である水不足が緩和される。野菜栽培の大幅な作業効率化、生産拡大が見込まれる。

4. ザンビア事務所運営

【事業状況】

- TICO駐在員一名、SCDP一名、SCDPインターン一名、合計三名の日本人スタッフとSCDP九名のローカルスタッフにて業務が遂行されている。主要業務は上記プロジェクト運営、労務管理、終了プロジェクトモニタリング、スタディツアー運営である。

【今後の方針・見通し】

- 日本人三名体制は続く予定。安全管理を最重要としつつ、助成金を確保できた農業分野拡充を図る。本年8月にスタディツアーを予定している。

II. 国内事業

5. 機関誌、パンフレットの発行

【事業状況】

- 昨年9月にNPO法人になってからは、機関誌「Face to Face」のスタイルをニューズレター形式にし、3ヶ月ごとの定期的に発行した。現在3号まで発行。

【今後の方針・見通し】

- 次号は、6月に発行予定。年4回の発行を予定している。ただ、問題点として、編集スタッフの不足や原稿の集まりが悪く発行が遅れる傾向にある。

6. 徳島県内外の学校、講演会、セミナー等への講師派遣

【事業状況】

- 講師派遣については、昨年度も依頼が多く、9月以降でも13回あった。
- 講演内容もワークショップ形式のものが好評である
- 中には講演が切っ掛けで、小規模開発ローンプロジェクトなどへの出資に繋がったケースもいくつかある。

【今後の方針・見通し】

- 今年度も既に、5回実施しており、現時点で6月に3回、7月に1回予定している。
- 特に学校関係には、1回だけの学習ではなく、継続的な学習にできるよう働きかけをしていきたい。
- また、学校との結びつきを深め、支援につなげていきたい。
- 講師については、吉田代表と福土事務局長の2名のみで対応しており、他の講師の要請も必要である。
- 講師の研修などにも参加し、新しい開発教育の材料の収集などにも取り組みたい。

7. 地球市民教育勉強会(地球人カレッジ)の開催

【事業状況】

- 昨年度(9月以降)は計7回実施されている。毎回、30人程度の参加を望んでいるが、最近数が減ってきている。
- 講師の選出に苦労しており、今後心配である。

【今後の方針・見通し】

- 講師の確保については、県の実施するアドバイザー派遣事業などを利用して、遠方からの講師も招きたいと考えている。これによって経費も節約する事ができる。
- 講演内容についても、参加者の意見を取り入れていきたいが、参加者からは、あまり意見が得られていない。

8. 他の市民活動を行う団体との共同支援活動、他の市民活動を行う団体への相談、助言

【事業状況】

- 昨年度は、吉田代表が外務省で行われたG I I / I D I 懇談会に出席し、その成果の一つとして、マラウイでのH I V / エイズ対策案件をワールドヴィジョンと連携して助成金申請まで至った。
- また、救急関係のプロジェクトでは、J P R と連携し、ザンビアへ日本人の専門家がボランティアで4名渡航し、救急救命技術の指導が行われた。

- 四国内においても、いくつかの団体と接触があり、関係構築が徐々にできつつあるが、具体的な事業には結びついていない。講師としてやパネラーとして会議等に招かれる程度である。
- 徳島県内では、県とNGOの連携のためのミーティングが3月にはじめて持たれ、今後、定期的にミーティングが持たれるようである。

【今後の方針・見通し】

- マラウイでの案件については、これから外務省へ助成金を申請し、認められれば事業が開始されるが、どうなるかは不透明な状況である。
- しかし、このプロジェクトがスタートすれば、T I C Oから1名をスタッフとしてこの事業へ参加させる予定であり、この欠員に伴う人員の確保が必要となる可能性もある
- 救急プロジェクトにおけるJ P Rとの連携は、今後も継続する予定である。ザンビアでの活動はもちろん新たにスリランカでの事業も模索中である。
- 四国内では、四国NGOネットワークが発足し他団体同士の連携が活発化しているようであるが、本来事業に影響が出ない程度に対応していきたい。

9. スタディツアー

【事業状況】

- 昨年は、9月に1回スタディツアーを開催し、5名が参加した。
- 今回から農村でのホームステイもプログラムに盛り込まれ、参加者には、好評であった。

【今後の方針・見通し】

- 最近では、学生の参加者は増える傾向にあるが、一般の参加は少ない。

10. その他

- チャリティーコンサートは、T I C O主催のものは行われなかったが、9月にヒダノ修一さんの呼びかけで横浜の大船カソリック教会の信者の協力を得て、300人ほどが集まり、ザンビアへ救急車を送る目的でのチャリティーコンサートが行われ、総額90万円近くの寄付が集まった。
- パネル展やチャリティーバザーは行われなかった
- ホームページについては、広報のツールとしては大変有効と感じている。ホームページ上でザンビアグッズの販売を行ったが、少しではあるが販売に繋がった。また、入会手続きをできるようにした。
- ブログを使用してこのプロジェクトの進捗状況の報告を行うようにしている。HPより簡単で、写真付きの報告をリアルタイムで見ることが出来非常に便利である。現在は、スタッフ間のみでの閲覧としているが、今後は、一般への公開を検討したい。
- インターネット電話を4月から導入し、在外事務所との連絡がさらに容易となった。ただ、タイムラグがあって、使い勝手は今ひとつである。メールとの共用によって、さらに密度の濃い連絡体制となっている。
- チャリティーコンサートは、今秋に開催できないか検討中
- 収益事業としての農産物の販売。
- アイディアは沢山あるものの、具体化には至っていない。
- 新会員は9月以降で8名。そのうち、何人かは、インターネットを通じた県外の方であった。
- N P O法人化によって、書類等の事務量が増加しており、新たな職員の配置を検討する必要が出てきた。